

藤原宮第25次の調査

(昭和54年1月～昭和54年5月)

この調査は藤原京内を通る国道165号線榿原バイパスの建設予定地内で工事に先立って実施したものである。調査地は西二坊大路の推定位置から西方約40mにあたり、右京三条三坊から右京五条三坊にかけての南北にのびた約400m、東西約6mの地区である。本地区には三条大路・四条条間小路・四条大路の存在が予想され、調査の主要目的はそれら大路・小路の検出にあった。

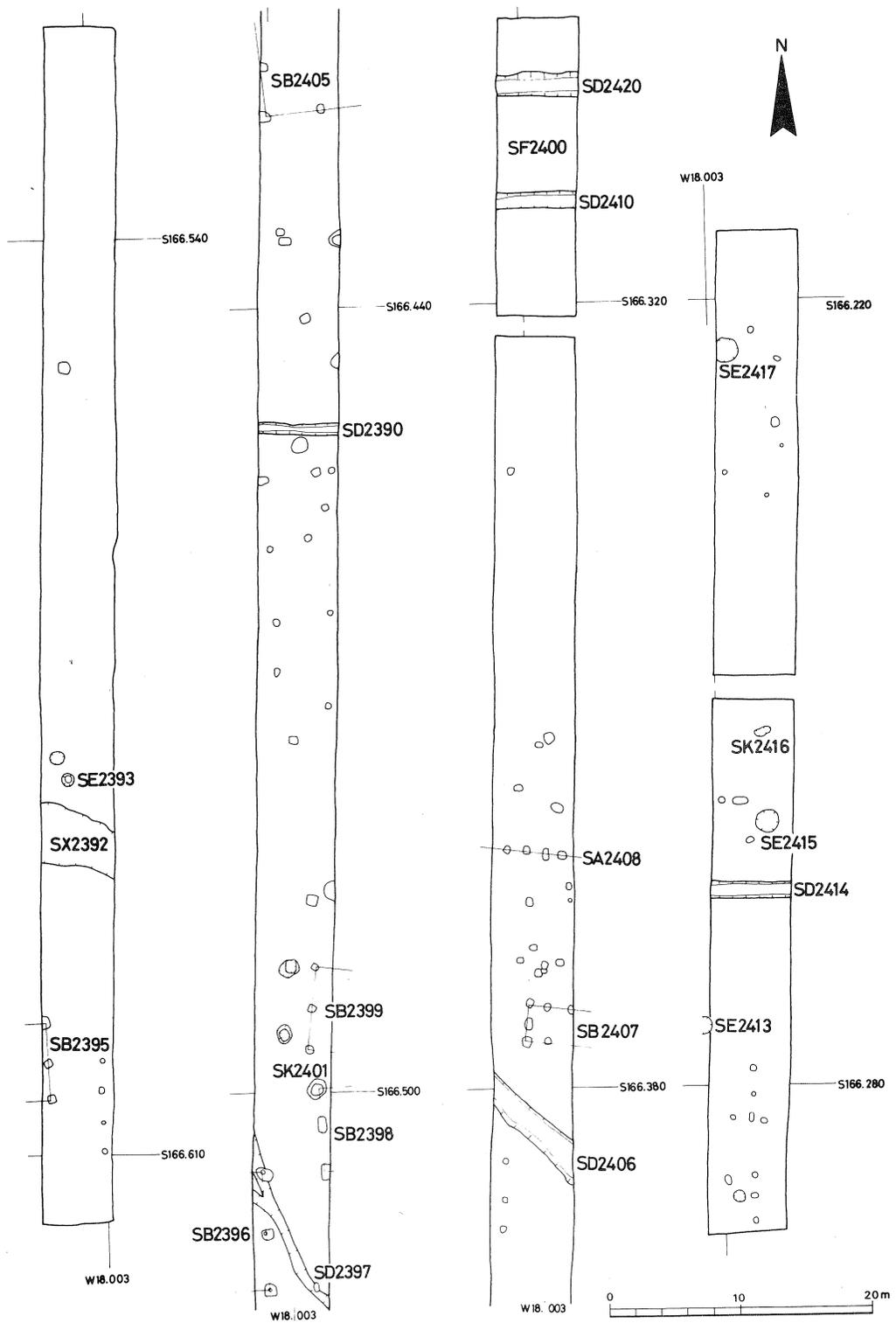
調査の結果、検出した遺構は藤原宮期・藤原宮期に前後する時期のものにわけられる。藤原宮期の遺構には三条大路および南北両側溝・四条条間小路南側溝・井戸4・溝2・掘立柱建物6・掘立柱塀2のほか土壇・柱穴などがある。藤原宮期以後の遺構には掘立柱建物1・井戸2・溝などがある。以下、時期別に主な遺構について述べる。

藤原宮期の遺構 SF2400は三条大路、SD2410はその南側溝、SD2420は北側溝である。SD2410は溝幅約1.2m、深さ0.3m、SD2420は溝幅約1.7m、深さ0.4mであり、両溝ともに素掘りの溝である。埋土からは藤原宮期の土器が出土している。両側溝の心々距離は9.0m、三条大路の路面幅は約7.5mである。

SD2390は四条条間小路の南側溝である。溝幅約1m、深さ0.2m前後の素掘りの溝である。藤原宮期の土器を出土している。

四条条間小路SF1731についてはその北側溝が検出できなかったため道路の幅員は明らかではない。また、四条大路および南北両側溝についても道路の推定位置が後世に河川の流路となったために検出できなかった。

SE2413は三条大路の北方にある井戸である。検出したのは井戸枠を抜取った円形の穴の一部で大部分は調査地区外にあり、西壁の土層によってそのおおよその形を知ることができた。上部径約1m、深さ1mである。藤原宮期の土器が出土している。SE2415はSE2413の北にある井戸で、径1.7mの井戸枠



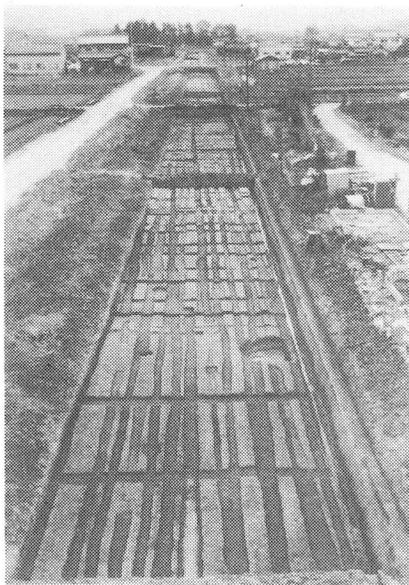
藤原宮第25次調査遺構配置図 (1 : 500)

抜取りの円形の穴である。深さ 1.7 m，底部径 0.8 m である。藤原宮期の土器，瓦などが出土している。SE 2417 は調査区北端近くにある井戸で，径 1.75 m の井戸枠抜取りの円形の穴をもつ。深さ 2.3 m，底部径 0.6 m である。内部からは須恵器の完形品 2 点を含む藤原宮期の土器・瓦・埴などが出土している。

SD 2414 は三条大路の北方に位置する素掘りの東西溝である。溝幅 1.3 m，深さ 0.25 m で，底面はほぼ平坦である。溝の断面形は逆台形を呈し，藤原宮期の土器が出土している。この溝と三条大路との心々距離は 42.6 m であり，三条大路と三条条間小路の距離（1 町 = 450 尺）の $\frac{1}{3}$ にきわめて近い値となる。

SK 2416 は SD 2414 の北方にある土塚で，長径 1.3 m，短径 0.6 m の東西に長い楕円形を呈す。深さ 0.6 m であるが，底面東側に深さ 0.2 m ほどのピット状のくぼみをもつ。7 世紀後半の土器が出土している。

掘立柱建物は 6 棟を確認している。ほとんどが一部を検出したにすぎず，遺物も出土していないので規模や時期など不明な点が多い。SB 2395 は 2.9 m 等間で南北に並ぶ柱穴 2 間分を検出した。SB 2396 は東妻の部分を検出した。梁行 2 間，4.6 m 等間で柱掘形にはすべて柱痕跡をとどめている。SB 2398 は西妻の部分を検出した。梁行 2 間，3.2 m 等間である。北側の柱穴は土塚 SK 24



調査地全景（北から）

01 と重複しており，土塚より新しい。SB 2399 は西妻の部分を検出した。梁行 2 間，3.2 m 等間である。SB 2405 は建物の南西隅柱とそこから北と東へそれぞれ 1 間分ずつ検出した。柱間 4 m 等間で，柱穴にはいずれにも根石と思われる拳大の礫が数個認められた。SB 2407 は梁行 2 間，桁行 3 間以上の東西棟と推定される。柱間は梁行 1.4 m，桁行 1.6 m 等間である。SB 2407 の北側柱列から北へ約 12 m のところに東西にのびる掘立柱塀 SA 2408 がある。3 間分を検出し，柱間は 1.4 m 等間である。これら 6 棟の建物と塀の方位をみ



三条大路SF2400 遺構配置図・断面図（1：100）

ると、北で西に振れるもの（SB 2395・2396・2398・2405）と、北で東に振れるもの（SB 2399・2407，SA 2408）とがある。前者のうち、もっとも振れの大きいSB 2405を除いて、他の3棟の方位は等しい。後者ではいずれも同一方位を示している。このことから、SB 2395・2396・2398の3棟，SB 2399・2407およびSA 2408はそれぞれ同時期のものとみることが可能である。しかし、両者の新旧関係については今回の調査では明らかにできなかった。ただ藤原宮第16次・19次調査などにおいても小規模な掘立柱建物が確認されており、今回検出した6棟の建物と塀も共通の性格をもつと考えれば、7世紀後半の建物とすることができる。

藤原宮期以前の遺構 SD 2397は、東南から北西方向に流れる自然流路で、藤原宮期遺構検出面の下層で検出した。調査区西端近くで流路が二つにわかれている。幅は0.7 m前後で分岐する部分では1.5 m，深さは10 cmほどである。遺物は出土していないが層位から弥生時代のものと思われる。SD 2406は北西

方向に流れる素掘りの溝で、溝幅 2 m 前後、深さ 0.5 m である。布留式土器が出土している。

藤原宮期以後の遺構 いずれも中世以降のものである。SE 2393は上部が破壊されているが、径 1 m の円形を呈する井戸で深さ 0.4 m、底部径 0.25 m をはかる。底に小石を厚さ 10 cm ほど敷いている。室町時代後半の土師器皿・土釜などの土器、瓦、曲物、箸などが出土している。

出土遺物 土器類、瓦埴類、木製品などがある。藤原宮期の遺物としては土器、瓦、埴がある。土器には須恵器、土師器があり、主として三条大路側溝と井戸から出土した。主な土器には大路側溝の須恵器・土師器と、井戸 SE 2417 の須恵器長頸壺・短頸壺・杯 B、土師器甕などがある。瓦の出土量は少なく、型式のわかるものは軒平瓦 6641 F の 1 点のみで井戸 SE 2417 から出土した。埴は縄叩き目のあるもので SE 2417 から出土した。このほかに土器としては古墳時代の土師器が少量出土している。布留式土師器を出土した SD 2406 を除いて遺構にともなうものはないが、大型の壺や小型丸底壺などがある。

まとめ 今回の調査成果から藤原京条坊についてまとめておく。三条大路および四条条間小路南側溝の中心位置の座標は

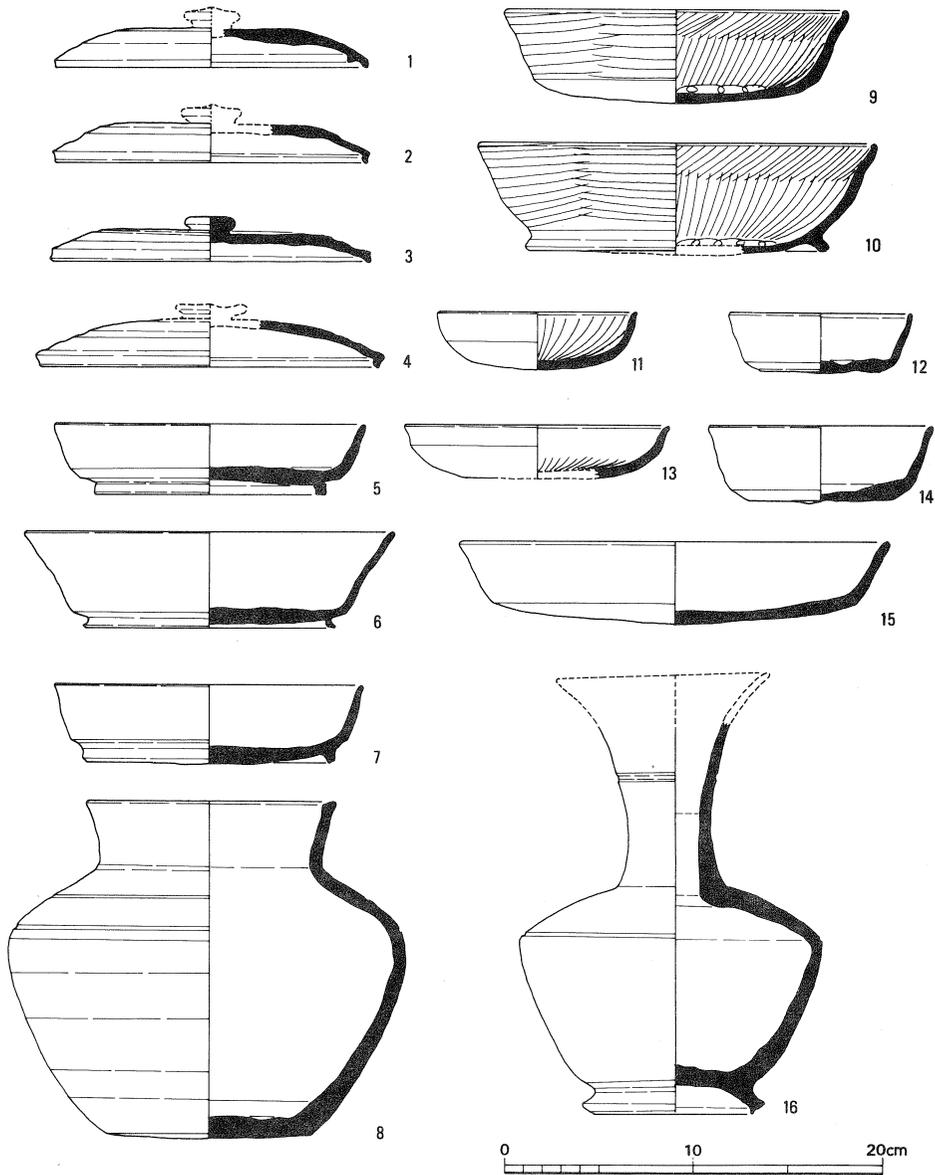
三条大路 SF 2400 X = - 166, 307, 8 Y = - 18, 000, 0

四条条間小路南側溝 SD 2390 X = - 166, 449, 1 Y = - 18, 000, 0

である。

三条大路南北両側溝の心々距離は 9.0 m で 3 丈となる。藤原宮第 27 次調査（本概報）においても三条大路を確認しており、心々距離約 9 m である。大路両側溝の心々距離は、六条大路 21 m（概報 8）、八条大路・西三坊大路 15 m（概報 6）で、第 27 - 14 次調査（本概報）では四条大路約 16 m である。このことから、三条大路の幅は他の大路に比べて狭いことが指摘できる。また、三条大路の国土方眼に対する振れは北へ $0^{\circ}32'24''$ （第 27 次調査との東西距離 1040 m）、四条条間小路南側溝の振れは北へ $0^{\circ}54'$ （第 27 - 14 次調査との東西距離約 1550 m）である。三条大路と四条条間小路 SF 1731 間の距離（1 町）であるが、今回の調査では四条条間小路北側溝を検出していないために道路心を決定できないが、

仮に四条条間小路が第27-14次で確認している幅（溝心々約7m）と同規模であるとするならば、道路心々距離137.85mを得る。この値は従来知られている1町の値より長くなる。以上のように、今回の調査では条坊に関して三条大路の幅が他の大路より狭いこと、一町の実距離が長いという新たな知見を得たのである。しかし藤原京条坊制の詳細は今後の調査をまたねばならない。



藤原宮第25次出土土器実測図

1・2・9・10-三条大路側溝, 3・4・14・15-S E 2415, 5・6・13-S E 2413,
7・8・16- S E 2417, 11・12-S K 2416